

48

正法眼蔵にみる大和言葉による身体名称

誌上発表

野田 亨

びわこリハビリテーション専門職大学

【緒言】正法眼蔵は道元によって書かれた鎌倉時代の仏教書である。この書物には多くの版が知られているが、仮名混じり文の75巻ものが一般的に知られている。その内容は仏教に関する教えが中心ではあるが、僧が修行を行う際の所作について細かな解説を記した部分がある。その記載の中に大和言葉による身体表現が散見され、鎌倉時代の一知識人によって記録された、人体各部の大和言葉による身体語彙を伝える資料として重要である。

【目的】これまで、筆者は中国、朝鮮から伝わった、いわゆる漢語による身体語彙ではなく、古来、日本で用いられていた大和言葉（和語）による身体語彙を収集してきた。その方法としては、①上代の古事記、万葉集、日本書紀、正倉院文書などに書かれた万葉仮名による身体語彙を収集する、②平安時代に編纂された倭名類聚抄などの辞書類に掲載された身体語彙を収集する、③仏教経典の音義などに書かれた身体に関わる漢字に付されたカナから身体語彙を収集する、④平安時代以降の仮名交じり文に書かれた文字資料から古代の身体語彙を推測する、などが考えられる。本研究は、上記の④に相当し、本資料から上代の文字資料に記載されていない身体語彙が見いだせる可能性、またこの時代に使われていた身体語彙が上代や現代のそれとどのように異なっているのかなどが研究目的となる。

【方法】正法眼蔵は、原文全体が松門寺によってインターネット上に公開されている。それらの全文から大和言葉による身体語彙を確認した。特に大和言葉による身体語彙が多い「坐禅儀」、「洗面」、「洗淨」の各巻については、古本校訂「正法眼蔵」、岩波文庫版「正法眼蔵」、講談社学術文庫版「正法眼蔵」などを参考した。

【結果】正法眼蔵には多くの身体語彙が記載されていたが、多くは漢語による表現で身体そのものを表すというよりは、比喩的表現に含まれているものであった。大和言葉による身体語彙は、特に「坐禅儀」、「洗面」、「洗淨」の各巻に集中していた。それらを身体の上から下の順に記すと、全身の語彙では、「み」、「はだへ」、「あか」、「ほね」、頭部の語彙では、「かしら」、「かうべ」、「かみ」、「おもて」、「かほ」、「め」、「まなこ」、「みみ」、「はな」、「くち」、「くちびる」、「は」、「した」、「つばき」、「あぎ」、「ひげ」、頸部の語彙では、「くび」、「うなじ」、上肢の語彙では、「て」、「かた」、「ひぢ」、「うで」、「たなごころ」、「つめ」、躯幹部の語彙では、「むね」、「はら」、「ほそ」、「へそ」、「わき」、「せなか」、下肢の語彙では、「あし」、「もも」、「はぎ」、「おほゆび（足）」、「おほゆびさき（足）」、「くびす」などである。なお、「洗面」の巻については、洞雲寺本の別本が存在し、「はなたり」、「はのものとし」、「おとがひ」などの語彙が別に確認できた。

【考察】上記の大和言葉による身体語彙は、現代まで使用されているものが多かった。身体語彙は、同じ巻においても仮名書きと漢字書きが混在する箇所があった。臍という語彙について、「ほそ（坐禅儀）」と「へそ（洗面）」という異なる語彙を用いている箇所があり、「ほそ」から「へそ」への呼称変化の過程を示すものとも考えられた。平安時代の倭名類聚抄では、指を「および」と記されていたものが、正法眼蔵では、「おほゆび」とあるように、現代に近い呼称に変化していた。またこの時代、「うで」は、「洗面」において、「ひぢよりしも、うで、たなごころ、あらはなり」とあり、「うで」が肘と手掌の間の前腕を意味していたことも確認できた。以上、正法眼蔵は、大和言葉による身体語彙史の観点からも有益な資料であると思われる。

【謝辞、および利益相反】本研究はJSPS 科研費 JP17K18497 の助成を受けた。また本発表に利益相反はない。